

陶淵明の「息」字と「憩」字について

宇賀神 秀一

はじめに

陶淵明の「歸去來兮辞」には、現在目堵し得る資料において、あまり見られない「流憩」ということばが使われている。

園日涉以成趣 園は日に涉りて以て趣を成し

門雖設而常閑 門は設くと雖も而るに常に関ざせり

策扶老以流憩 扶老を策きて以て流憩す

時矯首而遐觀 時に首を矯げて而して遐觀す

(全六十句)

「流憩」について、例えば魏正申氏は「流連和休息、走走歇歇」と注しており、孟二冬氏は「慢歩休息」と説明している。日本でも概ね同じような解釈が為されており、例えば一海知義氏は「あちらこちらと歩き回って休息する」とし、また、田部井文雄・上田武氏は「散策の途中で歩みを止める。『流』は目的を定めず気ままに歩き回ること、『流連』に同じ。『憩』は歩みをとめて休憩すること」と説明している。「流憩」に関する従来の指摘が、

様々な場所を歩き回りつつ、その中で時に「休息する」とするのや、「休憩すること」とするのは分かりやすい見解であり、まずはその方向で理解して良いであろう。

ところで「帰去来兮辞」は、『文選』の卷四十五に採録されており、「憩」字に対して五臣の呂延濟は「憩、息也」と注している。つまり「憩」字と「息」字は義として互いに通じ合うことが分かる。

本稿は陶淵明詩文にみえる類似した義を有する「息」字と「憩」字について検討を加えていくものである。陶淵明詩文における「息」字と「憩」字について見ていくと、その用いられ方にそれぞれ一定の異なる傾向があることが窺える。陶淵明詩文における「息」字と「憩」字について比較検討し、その上で「帰去来兮辞」の「憩」字について、やや詳しく考察を加えたい。

一、「息」字と「憩」字について

「息」字は後漢の許慎の『説文解字』卷十心部に収録されており、その説解に「息、喘也」とあるように呼吸を意味している。段玉裁は「喘也。口部曰、喘、疾息也。喘為息之疾者、析言之。此云息者喘也、渾言之。人之気急曰喘、舒曰息。引伸為休息之称。又引伸為生長之称。引伸之義行而鼻息之義廢矣」と注しており、急速な呼吸を「喘」とし、緩やかな呼吸を「息」としている。そしてここから「休息」の義が派生し、また、それとは別に「生長」、すなわち発生し成長するといった義が生じることを説いている。『説文』と同じ系統の字典である梁の顧野王の『玉篇』では、「喘、息也。」とある。『爾雅』積詁には「棲・遲・憩・休・苦・喟・黷・咽、息也」とあり、『広雅』では積言に「息、休也。」「息、返也」と見え、積詁では「息、安也」と見える。

一方、「憩」字は『説文解字』には見られず、古い資料としては先に挙げた『爾雅』の一例のほか、『詩経』に一例見られるばかりである。『詩経』の用例は次に掲げる国風の召南「甘棠」篇に見える。

蔽芾甘棠 蔽芾たる甘棠

勿翦勿敗 翦る勿れ 敗そとなう勿れ

召伯所憩 召伯の憩いし所

(全三章、第二章、章三句)

「憩」字に対して毛伝は「息也」と注しているが、該句の「憩」字は、しばしば「愒」字の俗体であると看做されている。例えば、阮元はその校勘記において、「憩、唐石经、小字本、相台本同。阮校、案惠棟云、説文無憩字、当作愒。今考积云、憩本又作愒。小雅菀柳、大雅民劳经皆作愒、憩但愒之俗字耳、积文旧有誤、今訂正」と述べており、「甘棠」篇の「憩」字を古くは小雅の「菀柳」篇や大雅「民劳」篇と同じように、「愒」字に作っていたと考えている。段玉裁に至っては、『毛詩故訓伝』で「憩」字を「愒」字に改めている。彼らの考えるように、「憩」字が「愒」字の俗体だとすれば、「愒」字についても調査の対象とすべきものと思われるが、例えば、『玉篇』の心部には「憩、息也」と見られ、同じ心部に取られる「愒」字は「貧羨也、説文曰、息也」とあるように、俗字ではなく別字として扱われている。また、『文選』における「愒」字の用例は、卷二十九雑詩に収録される張華の「情詩」二首其一に一例あるのみで、李善は『爾雅』の「愒、貪也」を引く。それに対して「憩」字の用例は、十五例ほど見られ、李善が注するものに限って見てみれば、張衡の「思玄賦」の「憩」字に対して李善は『爾雅』の「憩、息也」を引く。謝靈運の「鄰里相送方山」詩、謝惠連の「泛湖帰出楼中翫月」詩、陸機の「於承明作与士龍」詩、

陶淵明の「始作鎮軍參軍經曲阿作」詩、顔延之の「陶徵士誄」并序などで、「甘棠」篇に注された毛伝の「憩、息也」を引いている。つまり、『文選』の用例からすれば、少なくとも六朝期にあつて、「息」字に通じるものとしては、「愒」字よりも「憩」字の方が普遍的に用いられていたと考えてよいであろう。

以上、「息」字と「憩」字の訓詁に関する古い資料を通じて、両字が類義的關係にあることを確認した。次に陶淵明の「息」字と「憩」字について検討を加えていきたい。まずは「憩」字から考察を加えることにする。

二、淵明の「憩」字について

陶淵明詩文における「憩」字の用例は都合五例を数える。はじめに「始作鎮軍參軍經曲阿作」詩では、「憩」字を次のように用いている。

弱齡寄事外 弱齡より事外に寄せ

02 委懷在琴書 懷を委ぬるは琴書に在り

被褐欣自得 褐を被りて欣び自得し

04 屢空常晏如 屢しば空しきも常に晏如たり

時來苟冥會 時來たりて苟しくも冥會せば

06 宛轡憩通衢 轡を宛けて通衢に憩わんとす

投策命晨裝 策を投げて晨裝を命じ

08 暫与園田疎 暫く園田と疎なり

眇眇孤舟逝 眇眇として孤舟逝き

10 縣縣歸思紆 縣縣として歸思紆わる

我行豈不遥 我行豈に遥かならざんや

12 登降千里餘 登り降ること千里餘

目倦川途異 目は川途の異なるに倦み

14 心念山沢居 心は山沢の居を念う

望雲慙高鳥 雲を望みて高鳥に慙じ

16 臨水愧游魚 水に臨みて游魚に愧ず

真想初在襟 真想 初めより襟に在り

18 誰謂形迹拘 誰か謂わん 形迹に拘せらると

聊且憑化遷 聊か且つ化遷に憑るも

20 終反班生廬 終には班生の廬に反らん

福永光司氏は本詩の第六句について、「貧窮飢餓を理由とする上述の彼の弁解とはやや異なった響をもっており、この赴任の時節の到来としてひそかに期待する語氣、現実社会への積極的な参入を人生の広場への自己解放として安堵する氣持さえ感じられる。」と述べている。また、岡村繁氏は「『時期が到来して、いささか機縁にめぐり合ったので、手綱をまるめて宮仕えの道にしばしの休息を取ることとした』」といっているが、この『轡を宛ねて通衢

に憩わん』という言いかたから、誰しも直ちに感じ取るであろう彼の職務に対する取り組みの甘さである。」と述べている。福永氏の見解は立身の機会に恵まれなかった淵明の仕官について、「憩う」ことを「自己解放」としており、淵明の仕官を積極的な態度として考えている。その一方で岡村氏はこの句を取り上げて淵明の「彼の職務に対する取り組みの甘さ」としており、「憩」字には仕官に対する消極的態度が表れているものと捉えている。確かに淵明は本詩の末尾に、自己の志を曲げずに、いつか清廉な庵に帰る決意をうたっており、官界を自己の定在すべき場所ではないことを認めている点から言えば、岡村氏の見解も首肯し得るものである。しかし岡村氏は「憩」字の源流を踏まえておらず、その点において賛同しかねる。改めて『詩経』召南「甘棠」篇を掲げれば次の通りである。

蔽芾甘棠 蔽芾たる甘棠

勿剪勿伐 翦る勿れ 伐る勿れ

召伯所茇 召伯の茇トビりし所

蔽芾甘棠 蔽芾たる甘棠

勿剪勿敗 翦る勿れ 敗こなう勿れ

召伯所憩 召伯の憩トビいし所

蔽芾甘棠 蔽芾たる甘棠

勿翦勿抃 翦る勿れ 抃たむむる勿れ

召伯所説 召伯の説トまりし所

本詩に付された小序に、「甘棠、美召伯也。召伯之教、明於南国」とあるように、召伯の敷いた善政を称えたものと解されている。『春秋左氏伝』定公九年の伝には、「甘棠」篇の第一章が引用され、「思其人、猶愛其樹、況用其道而不恤其人乎。子然無以勤能矣」とあり、潘岳は「馬汧督誄」の中で「思人愛樹、甘棠勿翦」と述べるように、「甘棠」篇は古くよりその善政を称える典故として用いられている。

さて、第一章の「芟」以下に注された鄭箋には、「芟、草舎也。召伯聽男女之訟、不重煩勞百姓、止舎小棠之下而聽斷焉。国人被其徳、説其化、思其人、敬其樹」と説かれている。「憩」字に対して毛伝が「息也」と注しているとは言え、それは単なる休息の義としてばかり解されるのではない。鄭玄は、召伯が「小棠」のもとに、その身を寄せて善政を敷いていたことを意味していると解している。時代を降れば、初唐の駱賓王の「至分陝」詩に次のような例も見られる。

憩棠疑勿剪 憩棠疑うらくは剪る勿かれ

06 曳葛似攀樛 曳葛 樛を攀ずるに似たり

至今王化美 今 王化の美に至り

08 非独在隆周 独り隆周に在るに非ず

(全八句)

「憩棠」は善政を象徴するものとして用いられており、改めて淵明の「始作鎮軍參軍經曲阿作」詩の用例を考えてみれば、その賓語に当たる「通衢」との関係において、「憩」字が「甘棠」篇に由来する善政や執政、或いは仕官といったイメージないし語感を帯びていることが分かる。淵明は更にまた「帰鳥」詩において次のようにうたっている。

翼翼帰鳥 翼翼たる帰鳥

02 晨去于林 晨に林より去る

遠之八表 遠くは八表に之き

04 近憩雲岑 近くは雲岑に憩う

和風弗洽 和風 洽ねからざれば

06 翻翻求心 翻を翻して心に求む

顧儔相鳴 儔に顧みて相い鳴き

08 景庇清陰 清陰に景れ庇われんとす

(第一章)

王叔岷氏は第三句、四句に対して、『八表同昏』陶公本有遠志、雜詩之五、『猛志逸四海、鷹翻思遠翥。』与此『遠之八表』同意。『近憩雲岑』喻暫為薄宦耳^註』と述べており、淵明のうたう「雲岑」を、かつて政界に身を置いた時のことを喩えたものとする。淵明が「始作鎮軍參軍經曲阿作」詩において政界に身を置くことに「憩」字を用いている点、また、「憩」字が「甘棠」篇に基づき執政や善政を敷くものとして継承されていることを踏まえた

ならば、王叔岷氏の述べるように、「帰鳥」詩における「憩」字もまた単なる休息としてうたっているのではないであろう。仕官し政界に身を置いた時を想起しているものと考えるべきである。なお、鍾京鐸氏の解釈に至っては、本句に対してより直接的に『詩経』「甘棠」篇を引いている。¹⁰⁾

改めて言えば、「始作鎮軍參軍經曲阿作」詩において「憩通衢」とうたつて政界に身を投ずるものとする思考の淵源には、『詩経』「甘棠」篇が意識されていると考えるべきであり、淵明の「憩」字を取り上げて、仕官に対する「甘き」などと断定するのは早計に過ぎる。少なくとも自己の本性を曲げてまで、「憩」、すなわち仕官しているということをまずは認めるべきであろう。同じ句の「宛轡」が曾集本¹¹⁾や汲古閣本¹²⁾、湯漢本¹³⁾、李公煥本¹⁴⁾といった版本で「婉恋」に作っているのは、句全体の意味が大いに異なることになるとはいえ、淵明が仕官するということを、待ち焦がれていたものと考えられていたという点では、「憩」字の理解において非常に示唆的である。次に「影答形」詩における用例を見ていきたい。

与子相遇来 子と相い遇いてより来

06 未嘗異悲悦 未だ嘗て悲悦を異にせず

憩● 蔭若暫乖 蔭に憩●えば暫く乖るるが若くなるも

08 止日終不別 日に止まれば終に別れず

(全十六句)

「子」は「形」、すなわち肉体を指している。ここでの「憩」字は、その対偶にある「止」字と似た義でうたわれており、「憩」字の下に「暫」とあるように「憩蔭」を暫時の別れとして用いられている。丁福保が「言身憩息於

蔭下、則影不能現、故影与形為暫別」と述べるのが要を得た説明と言えるであろう。この例には必ずしも先の例に見たような「甘棠」篇に由来する政治、任官といった語感は窺えないようである。

次に「閑情賦」の末尾では次のようにうたわれている。

尤蔓草之為会 蔓草の会を為すを尤めて

誦邵南之余歌 邵南の余歌を誦ぜん

坦万慮以存誠 万慮を坦らげて以て誠を存し

憩遥情於八遐 遥情を八遐に憩わしめん

(全百二十二句)

「遙情」は果てしない感情であり、「遊斜川」にも「中觴縱遥情、忘彼千載憂」(第九聯)と見える。「閑情賦」のモチーフとして、ここでは美女を恋い慕う感情をいい、それを最果ての地にあずけ、鎮めることに「憩」字が用いられている。この例もまた政治や仕官といった語感は見えないが、しばらくは鎮められた慕情もまたわき起こるものであれば、暫時的な動作としてうたっているものであり、そうした意味からすれば、「蔭」に身を寄せることによって、影と体の一時的な別れをうたった「影答形」詩の例と同じように考えられよう。

淵明の「憩」字は、その動作の場所として、しばし政界に身を置く際に用いられ、一過性、暫時的な「いこい」として用いる傾向が窺えるものである。以上の意味において、彼にとつて「憩」字は必ずしも本来定在すべき所ではない場所に一時の間、身を寄せる際に用いられることが多いと言える。それでは次に淵明の「息」字について考えていきたい。

三、淵明の「息」字について

淵明詩文における「息」字は都合十五例を数えるが、その中には「憩」字が執政や仕官する際に用いるのとは異なり、官界を拒否するような用い方をする例が幾つかみられる。

歸去來兮

歸りなんいざ

請息交以絶遊

請う交りを息めて以て遊を絶たん

世与我而相遺

世と我とは而るに相い遺う

復駕言兮焉求

復た駕して言に焉をか求めん

悅親戚之情話

親戚の情話を悦び

樂琴書以消憂

琴書を樂しみ以て憂いを消さん

農人告余以春及

農人余に告ぐるに以て春の及べるを以てし

將有事於西疇

將に西疇に事有らんとす

(「歸去來兮辭」)

「歸去來兮辭」における「息」字は、「憩」字の仕官することに用いるものとは異なっており、「交」、すなわち俗世との交際を絶つて、官界から逃れるものとして用いている。これは次に掲げる用例においても同じである。

●息交逝閑臥 交りを息めて閑臥に逝き

06 坐起弄書琴 坐起して書琴を弄ぶ

園蔬有余滋 園蔬 余滋有り

08 旧穀猶儲今 旧穀 猶お今に儲う

(「和郭主簿」其一、全十八句)

傾身營一飽 身を傾けて一飽を営まば

08 少許便有餘 少許にして便ち餘有り

●恐此非名計 此れ名計に非ざるを恐れ

10 ●息駕帰閑居 駕を息わしめて閑居に帰す

(「飲酒」其十、全十句)

閑居執蕩志 閑居して蕩志を執り

02 時駛不可稽 時駛せて稽むべからず

●驅役無停息 役に驅られて停息無く

04 軒裳逝東崖 軒裳 東崖に逝く

(「雜詩」其十、全十四句)

「和郭主簿」其一は、俗世との交渉を絶ち、隱棲に遊ぶ中でうたわれており、「帰去来兮辞」と同じように「息交」とする。「飲酒」其十の「息駕」の「駕」字は「飲酒」其九で次のようにうたわれている。

紆轡誠可学 轡を紆ぐるは誠に学ぶべきも

14 違己詎非迷 己に違えば詎ぞ迷いに非ず

且共飲此飲 且く共に此の飲を飲ばん

16 吾駕不可回 吾が駕 回らすべからず

(全十六句)

老人が淵明に仕官することを勧めるために尋ねて来て、淵明はそれに対して「吾駕不可回」とうたつて拒否している。第十三句に仕官することを「紆轡」とうたい、その対偶に「違己」とうたつているのが、仕官を拒否する理由である。「違己」というのは「帰去来兮辞」の序に、「饑凍雖切、違己交病」と見える。つまり淵明にとって官界に身を寄せるということは、精神と肉体を病ませることであつた。それを繰り返すことを避けるために、「吾駕不可回」とうたつており、そうだとすれば「飲酒」其十における「息駕」とは、より直接的には車を休めることを指しているが、その根底にあるのは精神と肉体の「いこい」のためであり、生を傷つけかねない官界という場所を避ける意味を込めて、「息」字を用いているのである。

「雑詩」其十の「息」字は、淵明が政界に身を置いたときのことを回想しつつ、その世界にあつては、片時たりとも「いこい」得ぬものとして用いられている。

「憩」字と「息」字とは、類義した文字であるが、その「いこい」の場所にあつては相違している。淵明における「息」字とは、彼にとって生を傷つけることになる官界などを、その定在する場所と認めていたとは考え難く、寧ろ反対に生命の危うさを避ける意味を孕んでいるものと考えられるのである。

次は隱棲生活を営む中でうたわれている「息」字の例について見ていきたい。「時運とき」詩では、朝に夕べにゆ

つたりと休息を取ることに用い、「庚戌歳九月中於西田穫早稻^{（註）}」詩では、農作業を終えて、酒を飲みつつ休息を取ることに用いている。ここでは特に「癸卯歳始春懷古田舎」其二について考えていくこととする。

先師有遺訓 先師 遺訓有り

02 憂道不憂貧 道を憂いて貧を憂えざれと

瞻望邈難逮 瞻望するも邈かに逮び難く

04 転欲心長勤 転た心は長勤を欲す

秉耒歛時務 耒を乗りて時務を歛ぶ

06 解顔勸農人 顔を解きて農人に勸む

平疇交遠風 平疇 遠風交わり

08 良苗亦懷新 良苗 亦た新を懷う

雖未量歲功 未だ歳功を量らずと雖も

10 即事多所欣 即事 欣ぶ所多し

耕種有時息 ● 耕種 時有りて息い

12 行者無問津 行者 津を問う無し

日入相与帰 日 入りて相い与に帰り

14 壺漿勞近鄰 壺漿もて近鄰を勞う

長吟掩柴門 長吟して柴門を掩ざし

16 聊為隴畝民 聊か隴畝の民と為らん

(「癸卯歲始春懷古田舎」其二)

本詩の第二句では、『論語』衛靈公篇の一文をそのまま引用し、それに反論する形で展開されている。また、第十一句の「時息」の対に置かれる「問津」は、『論語』微子篇の「長沮桀溺耦而耕。孔子過之、使子路問津焉」を踏まえている。本詩の「問津」について、一海知義氏は「飲酒」其二十の「不見所問津」と「桃花源記」の「後遂無問津者」とを比較しつつ、「この『無問津』という語は、さきの二例と同じく『求道の士』がないという意味にも解せぬこともない。しかし、私には、孔子に対する揶揄のように読める。すなわち孔子のようにうるさく道を尋ねる者はいない、そういう煩わしさが無い、という意味ではないか」と推している。この点と淵明が官界に身を寄せることに「憩」字を用いている点を併せて考えてみると、その儒家的な煩わしさから逃れた、隱棲者の「こい」として用いられており、ここでの「息」字は静寂さといった語感を含んでいるものと考えられる。

さて、この静寂さを含む「息」字の例は、次に掲げる「九日閑居」詩において「風」を主語とする例とも相連なるものである。

世短意常多 世短く意常に多し

02 斯人樂久生 斯の人久生を樂ながう

日月依辰至 日月辰に依りて至る

04 舉俗愛其名 俗を舉げて其の名を愛す

露淒暄風息 露淒として暄風息ふみ

06 気澈天象明 気澈みて天象明かなり

往燕無遺影 往燕 遺影無く

08 来雁有餘声 来雁 餘声有り

酒能祛百慮 酒は能く百慮を祛い

10 菊解制頽齡 菊は解く頽齡を制す

如何蓬廬士 如何んぞ 蓬廬の士

12 空視時運傾 空しく時運の傾くを視るや

塵爵恥虚疊 塵爵 虚しき疊たろを恥じ

14 寒華徒自栄 寒華 徒らに自ら栄ゆ

斂襟独閑謠 襟を斂めて独り閑かに謠えば

16 緬焉起深情 緬焉として深き情起こる

棲遲固多娛 棲遲 固より娛しみ多く

18 淹留豈無成 淹留 豈に成る無からんや

本詩では重陽の節句において、「暄風」という暖かな風が止んだことに「息」字を用いている。第十五句に、襟をあわせて独り静かに詠ずる、とうたっている点を踏まえれば、「露凄暄風息」の句が淵明の静かな心象風景を表しているということが分かる。その一方で「庚子歳五月中従都還阻風于規林」詩其二では次のようにうたわれている。

自古歎行役 古より行役を歎ずるも

02 我今始知之 我今始めて之を知る

山川一何曠 山川一に何ぞ曠しき

04 巽坎難与期 巽坎与に期し難し

崩浪聒天響 崩浪 天に聒しく響き

06 長風無息時 長風 息む時無し

久游恋所生 久しく遊びて所生を恋う

08 如何淹在茲 如何んぞ淹まりて茲に在る

静念園林好 静かに念う 園林の好きを

10 人間良可辞 人間 良に辞ずべし

当年詎有幾 当年 詎ぞ幾ばくも有らんや

12 縦心復何疑 心を縦にして復た何をか疑わん

本詩におけるモチーフは公務の厳しきであり、公務に身を寄せる中で、大波が荒れ狂い、その波の音は天にまで響き渡り、そしてしきりに暴風に吹き付けられていることを「長風無息時」とうたっている。第七句以下では、自己の身を置くべき場所である田園をおもい、俗世を辞する決意をうたっている。公務の厳しい現実を背景としてうたわれる「長風無息時」の句と、「九日閑居」詩における「露淒喧風息」の句は、その対比において、「九日閑居」

詩でうたわれる「暄風息」というのは、隠棲生活を獲得することによって得られた静けさであることが窺えよう。それでは最後に「停雲」詩の「息」字について検討を加えて考察を終えることとしたい。

翩翩飛鳥 翩翩たる飛鳥

02 息●我庭柯 我が庭の柯に息●

斂翮間止 翮を斂めて間止に

04 好声相和 好声相和す

豈無他人 豈に他人に無からんや

06 念子実多 子を念うこと実に多し

願言不獲 願^{おも}うも言^{われ}獲^れず

08 抱恨如何 恨みを抱くこと如何

(第四章)

「停雲」詩の表現は、人間世界のことについて、自然物を通して象徴的にうたう興の技法が用いられていると言える。吉川幸次郎氏が「ある主題を歌うにさきだち、歌わんとする主題と似た現象を、自然の中に見いだし、それによって歌いおこす技法、それが『興』である」とするのに従えば、第五句以降にうたわれるものが主題に当たり、第六句にうたわれる「子」とは、「主題と似た現象」という点において、第一句の「飛鳥」を指しているものと考えられる。なお、第一句の「翩翩」は、「擬古」其三において次のようにうたわれている。

翩翩新来燕 翩翩たり 新来の燕

06 双双入我廬 双双として我が廬に入る

先巢故尚在 先巢 故 尚お在り

08 相将還旧居 相い将いて旧居に還る

自從分別来 分別してより来

10 門庭日荒蕪 門庭 日びに荒蕪す

我心固匪石 我が心 固より石に匪ず

12 君情定何如 君が情 定して何如

(全十二句)

「擬古」其三において、第五句から八句では、古巢にもともと棲んでいた燕が、新たな仲間を引き連れて戻ってきたことをうたっている。第九句以下において、友人との別れ、そして『詩経』邶風の「柏舟」篇を引いて、自己の揺るぎない志を示し、いつまでも帰ってこない友人にその心情を問いかけている。詩の末尾にうたわれる「君」について、古直は「其故人如顔延之等、勉事新朝者尚多、故曰『君情定何如』」と述べ、「君」が宋朝に仕えた顔延之ら知友を指すものとしている。

これまで見てきた「息」字において、その多くが政界を拒否するような語感を伴っている点と、「停雲」詩と類似した表現が取られた「擬古」其三の「君」に対する古直の指摘、これらを踏まえてみると、「停雲」詩にうたわれる「息」字は、淵明の親友である「子」が官界から本来あるべき所に帰ってくることを望んでいるものと考えられる。淵明は「停雲」詩の中で、「飛鳥」に官界に身を寄せている親友を見出し、そういった俗世を拒否して

「翩翩」として本来あるべき場所、ずっと定在すべき地に帰ってくることを望んで、「息」字を用いているのである。

おわりに

本稿は淵明詩文における「憩」字と「息」字を検討することによって、淵明の「憩」字は、仕官することに用いられていること、また、その「いこい」は、暫時的であるという点が看取され、本来定在すべきでない場所にしばし身を寄せる際に用いる傾向があることを明らかにした。一方で、「息」字は、官界に身を置くことによって生を傷めかねない危うさを避けて用いていること、本来在るべき場所に身を寄せている時に「息」字を用いていること、その語感には、静けさを内包している側面があることを明らかにした。淵明詩文における両字は、その「いこい」の場にあつては相違しており、決して混用されることはないのである。

以上の結論から「帰去来兮辞」の「憩」字について考えてみたい。改めて掲げれば次の通りである。

策扶老以流憩[●] 扶老を策きて以て流憩[●]す

時矯首而遐觀 時に首を矯げて而して遐観す

「帰去来兮辞」における「憩」字も他の用例と同じ傾向にあると考えれば、まずこの「いこい」はゆったりと、ずっと身を落ち着けるものではなく、暫時的であるという点である。「流」という「あちらこちらと歩き回」る動

作の中で、暫時的に身を止めるということに、「憩」字を用いているものと考えられる。また、本来定住すべきでない所に身を寄せるという点から言えば、山川の遊びもまた、一時のことに過ぎないのである。

今後の展望として「憩」字と「息」字の区別が謝靈運などにも見られるのか検討を加えてみたい。通時代的な考察を通して、詩人ごとの「息」字と「憩」字の使い分けについて明らかに出来ればと考えている。

*1 底本には陶澍『靖節先生集』（四部備要本）を用い、必要に応じて諸版を参照することとした。

*2 『陶淵明集訳注』文津出版社、一九九四年

*3 『陶淵明集訳注』吉林文史出版社、一九九六年

*4 一海知義『陶淵明』（世界古典文学全集・二五）筑摩書房、一九六八年

*5 『陶淵明全釈』明治書院、二〇〇一年

*6 『文選』の引用に当たって本文、及び李善注などは胡克本『文選』中華書局、一九七七年を用い、五臣注の引用に当たっては、『日本足利学校蔵宋刊明州本六臣注文選』人民文学出版社、二〇〇八年を用いた。

*7 『説文解字』及び段玉裁の注文の引用に当たっては、『説文解字注』上海古籍出版社、一九八一年を用いた。

*8 『宋本玉篇』中国書店、一九八三年

*9 『広雅疏証』王念孫著、鐘宇訊点校、中華書局、一九八三年

*10 『詩経要籍集成』中国詩経学会編、学苑出版社、二〇〇二年

*11 陶淵明の『真』について——淵明の思想とその周辺——、『東方学報』三三号、一九六三年五月、後に『魏晋思想史研究』岩波書店、二〇〇五年に所収。

- *12 『陶淵明——世俗と超俗——』（NHKブックス）日本放送出版協会、一九七四年
- *13 『潘岳集校注・修訂版』董志庵、天津古籍出版社、二〇〇五年
- *14 『駱臨海集箋注』陳熙晉箋注、中華書局、一九六一年
- *15 『陶淵明詩箋証稿』芸文印書館、一九七五年
- *16 『陶淵明詩註釈』学海出版社、二〇〇五年
- *17 続古逸叢書所収の『陶淵明詩』に拠った。
- *18 汲古閣蔵本『陶淵明集』中華再造善本に拠った。
- *19 続修四庫全書所収の『陶靖節先生詩注』に拠った。
- *20 四部叢刊所収の『箋注陶淵明集』に拠った。
- *21 『陶淵明詩箋』芸文印書館、一九六四年
- *22 「擬古」其七や「聯句」、「停雲」詩の序文に見られる「歎息」は名詞的であり、「息」字の原義の呼吸に近い意味である。段玉裁は、「引伸之義行而鼻息之義廢矣」としており、「憩」字との直接の比較対象とはし難いものであるため、考察の対象から外すこととする。
- *23 「時運」詩の第四章では第一句から四句では「斯晨斯夕、言息其廬。花葉分列、林竹翳如」とうたっているように、朝に夕なに静かな時間の中で、ゆったりと「いこい」を為している。
- *24 「庚戌歳九月中於西田穫早稻」詩の第十五句で「四体誠乃疲、庶無異患干。壘濯息簷下、斗酒散襟顔。遥遥沮溺心、千載乃相関。但願常如此、躬耕非所歎」（全二十句）とあるように、農作業を終えて軒下に「いこい」つつ、酒を飲む際に用いている。また、第十七句にこういった隠棲生活を営む中で、古代の隠者である長沮と桀溺と心を通じ合っていることをうたっている。

*25 「陶淵明の孔子批判」、『文学』巻四五巻、岩波書店、一九七七年四月号、第四五巻に所収され、後に都留春雄・釜谷武志『陶淵明』角川書店、一九八八年、その後、『一海知義著作集』二巻、藤原書店、二〇〇八年に所収。

*26 『詩経国風』（中国詩人選集 一）上巻、岩波書店、一九五八年の「解説」を参照した。

*27 『詩経』邶風「柏舟」篇には「我心匪石、不可転也、我心匪席、不可卷也、威儀棣棣、不可選也」（全五章、第三章）とあり、毛伝、鄭箋に「石雖堅尚可転、席雖平尚可卷。箋云言已心志堅平過於石席」とある。

*28 『陶靖節詩箋』広文書局、一九六四年

*29 『停雲』詩の序文に「停雲、思親友也」とある。

（筑波大学大学院人文社会科学科博士課程）